



# うわさが流れる —— 流言の心理学

西南学院大学人間科学部心理学科 教授  
柳澤さおり (やなぎさわ さおり)

本稿は、高校生のための心理学講座を取り上げ、講義のテーマを決定した過程や実際の講義方法についてご紹介します。

## 高校生と心理学

実は、心理学を教科として扱っている高校は日本にはありません。この点では高校生と心理学との距離は少し離れているように思います。しかし、心理学は、高校までに培った基礎科目の土台がないと習得が難しいという点で関連が深いと考えることができます。

心理学においては国語の実力が問われます。分かりやすい論理的なレポートや論文を書くことは、他の学問分野と同様に重要なことです。ただしそれだけでなく、実験や調査の参加者に読んでもらう、聞いてもらうための日本語能力が求められます。英語の読解力も求められます。程度の違いはありますが、世界の標準語になっている英語のテキスト、専門書、論文などを読まなければならないことが、心理学を学習する4年間に出てきます。また、高校時に確率・統計の学習機会があった生徒にとっては、大学での最初の統計学の講義は必要ないと言えるくらいの近さがあります。

## 高校生向け講座のテーマを決めるまで

私の研究の専攻領域は、社会心理学と産業・組織心理学です。講義内容の構想を練る際に、以下の条件をもとにテーマを決めました。

第一に、高校生にとって身近なテーマにすることです。それにより、生徒はその内容に関心を持ち、理解が進むと考えました。第二に、よく知られている事例があることです。新聞記事

などを積極的に取り上げ、事例をもとに心理学の用語や理論を説明して、現実場面と結びつけていくことを目指しました。第三に、実験や調査などの複数の手法による研究の蓄積があることです。心理学は様々な研究手法を用いて、人の行動や心理過程を明らかにしようとしていることを理解してもらうためです。第四に、社会心理学の一般的なテキストではあまり触れられないテーマを取り上げることです。それにより、社会心理学で研究されている内容の幅の広さを感じてほしいと思いました。

以上の4つの条件に合致する講座のテーマとしてSNSを利用したコミュニケーションを取り上げることができないだろうかと考えました。今の高校生はTwitterやLINEなどを日常的に利用している世代です。SNSを利用したコミュニケーションは、タイムリーであること、不特定多数の人に情報を一斉に伝達できることなどの特徴を持っています。日常生活を送るうえで、必要な情報だけでなく、うわさなどもあつという間に拡散してしまいます。この点に注目してうわさ(流言)についての講義を行うことを決定しました。

## 講義の内容

講義にあたって、プレゼンテーションソフトのスライドとワークシートも兼ねた配布資料を用いました。

講義では、最初に社会心理学の概要について説明した後うわさについての定義を説明しました。そしてうわさの伝播力を理解してもらうために、人はラジオ情報のほうが正確であると分かっているながらも、実際の自身の行動は、人づて情報によって大きな影響を受けることを明



### Profile—柳澤さおり

2001年、九州大学大学院人間環境学研究所博士課程単位取得後退学。博士（人間環境学）。中村学園大学流通科学部流通科学科専任講師を経て現職。専門は社会心理学、産業・組織心理学。著書は『人的資源マネジメント：「意識化」による組織能力の向上』（共著、白桃書房）など。

らかにした新潟地震（1946年）に関する研究結果を取り上げました。

次にうわさによって大きな問題となった3つの事例を取り上げました。一つめは、豊川信用金庫のとりつけ騒ぎです。うわさによって引き起こされた有名な事件ですので、心理学を学習している人が耳にしたことが多い事例だと思います。二つめは、2003年にチェーンメールによって佐賀銀行がつぶれるという情報が流れ、とりつけ騒ぎが引き起こされた事例です。三つめは、東日本大震災の影響で、ある製油所の高圧ガス施設でガスタンクが落下し、下にあったガス管が破裂して爆発炎上した際に、「有害物質が雲などに付着し、雨などといっしょに降る」という内容がTwitterやチェーンメールで猛烈な勢いで広まった事例です。これらのうち、豊川信用金庫に関しては、うわさを広めた人はそれを真実だと思って人に伝えたことによって広まりました。一方、佐賀銀行のとりつけ騒ぎと製油所コンビナートの火災に関しては、最初に流した人は意図的に嘘の情報を流した可能性が考えられますが、その情報が真実だと思って拡散させた人々が大半いたと思われます。

受講生には、配布プリントに書かれたこれらの事例の内容を読み「うわさの内容がどのように変化したのか」「うわさが広がる要因」について考え、その考えを発表するよう求めました。高校生のための心理学講座をこれまで3回ほど担当してきましたが、全ての回で高校生は手を上げて、自分の考えを発言してくれています。この発言を黒板に書いて、それらの発言内容と関連づけながら授業を進めました。

うわさの内容は変化していくことが多いです。人から人へと伝えられる過程で、不要と思

われた部分が切り捨てられたり、簡略化されたりします。同時に伝達者の関心の高い部分などが強調されたり、伝達者の感情や解釈によって情報が歪められることも多いです。ただし、口頭で伝わる場合と異なり、チェーンメールによってうわさが拡散される場合には、うわさの内容は変化しないことも多いです。

うわさの広がりには、個人特性、うわさの内容、うわさの流れる状況が関係しています。不安特性が高い人は、他の人にうわさの内容を伝達しやすいようです。信用できそうなうわさや恐怖を感じるうわさは拡散しやすいです。事例にあげた「銀行が倒産する」「有害物質に触れてしまう」という内容は、まさに恐怖を感じさせるうわさです。また、不安な状況やあいまいな状況もうわさの広がりに影響しています。事例が生じた時は、震災直後や金融機関の信用不安があるなど、人々が不安を感じる状況が存在していました。

最後に、「うわさに惑わされないためには、どうしたらよいと思いますか？」という問題を提起し、発言を求めてともに考え、講義を終りました。

授業の感想には、自分の体験に引きつけて考えてくれたことが分かる感想も多く、うれしく思います。うわさの研究の紹介を通じて、心理学が机上では終わらず、多かれ少なかれ現場の協力者と関係しながら、さらにその上に労力を費やして成り立つものであることが伝わったのではないかと考えています。心理学というと一瞬で人の心を読み取るのか？ というような単純な幻想を捨ててもらい、社会科学の一種としての心理学に触れてもらうことで、将来の進路決定の上でも役に立てたのではと思います。